

京都大学	博士(文学)	氏名	伊 崎 孝 幸
論文題目	晩唐の詩と詩論		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本論文は、晩唐詩を中心に扱った第一編と司空図の詩論を論じた第二編に分けられる。第一編では、主に詠史詩、詠物詩等のジャンル研究を通して晩唐詩の特徴を分析し、第二編では、司空図の「味外の旨」という言葉の解釈を手掛かりとして、彼の詩論の新たな側面に注目したものである。以下、章ごとにその内容を簡単にまとめることにしたい。</p> <p>第一編第一章「晩唐の詠史詩」は、詠史詩という文学ジャンルを通して晩唐詩の特質を探ろうと試みたものである。従来、晩唐詩で研究されてきたのは、杜牧、温庭筠、李商隠といったごく少数の優れた詩人達であり、その他の多くの小詩人に目が向けられることはほとんどなかった。そこで本章では、従来見過ごされてきた小詩人の作品も視野に入れることで、晩唐に書かれた詠史詩の時代的特質を解明しようとした。</p> <p>具体的には、第一節および第二節において、まず詠史詩というジャンルの変遷を探るために、その端緒とされる漢代から晩唐に至るまでの代表的作品を時系列に沿って概観し、晩唐の詠史詩が何を継承し、何を継承しなかったのかということ考察した。ここで継承されたものとして特に取り上げたのは、初唐から盛んに作られ、詠史詩とも深い関わりを持つ懐古詩である。その流れを確認した上で、晩唐で多くの懐古詩を制作した許渾、劉滄といった詩人の作品を取り上げ、その性質を論じた。一方、継承されないものとしては、とりわけ中唐以前の詠史詩が持っていた、詩中で取り扱う歴史上の人物や事件に対する抒情性を指摘した。またこれに対し、第三節では、晩唐の詠史詩には機知を好み、諧謔を楽しむ精神が溢れており、これがこの時代の詠史詩の最大の特徴であることを論じた。その際、杜牧の有名な「赤壁」「題烏江亭」などとともに、章碣、黄滔といった小詩人の作品を例に取り、そこに共通する時代性のあることを論じた。第四節では、胡曾、汪遵らの連作詠史詩を取り上げた。これらは、杜牧、李商隠らの詠史詩の陰に隠れ、あまり注目されてこなかったが、晩唐詠史詩の特徴をよく備えていると言える。</p> <p>第二章「晩唐の詠物詩」は、晩唐詠物詩の時代的特色を明らかにしようとしたもので、問題意識および方法論は、「晩唐の詠史詩」と同じである。ここでもやはり、個々の詩人に着目する従来の視点を離れ、詠物詩というジャンルの歴史的変遷を通して、これまで見過ごされてきた晩唐詩の特徴を捉えようと試みている。</p> <p>論文の扱う範囲は、詠物詩の形式が整ったとされる六朝時代の南齊・永明年間から晩唐後期までである。南朝において制作された詠物詩が宮廷サロン特有の遊戯的性格</p>			

を持つことはよく知られ、また初唐にも続くそうした流れを大きく変えたのが杜甫であることも、詩話などで盛んに論じられている。しかし、その杜甫の流れをくむ抒情的詠物詩が中唐を経て晩唐に及び、普遍化してゆくことはこれまで十分に跡づけられてこなかった。本章では杜牧、温庭筠、李商隠といった詩人はもとより、鄭谷、羅鄴といった中・小詩人の作品も例に取りながらそのことを詳しく論じた。またその過程で、盛唐、中唐期の詠物詩における詩と詩題との関係性の考察から、六朝期の詠物詩に見られたような題詠的性格が、この時代の詠物詩にも見られるということ論じた。その上で、そうした流れの延長に、杜甫的詠物詩とは異なる晩唐詠物詩のもう一つの特徴、すなわち作者の個人的な情感に基づかない新しいスタイルの詠物詩が主として晩唐後期に生じ、俄に流行を見たということ指摘した。これら晩唐後期に出現した新しい詠物詩の多くは七言律詩によって書かれており、その詩としての特質は詩題に示された対象物をいかに巧みに描写するかということに力を注ぐことにあり、同じ題材を扱った先行作品の言葉やイメージ、あるいは典故を詩中にちりばめることで独自の情趣を生み出すというものである。この時代にこうした詠物詩が多作されたことについては、宋・周弼『三体詩』にある僅か一条の指摘を除いては、これまでまったくと言っていいほど論じられなかったもので、その詩的性質の分析はもとより、その存在さえもが十分に知られていなかったものである。本章はこれら一連の七言律詩による詠物詩の独自性を、その歴史的な位置づけも考慮しながら詳しく論じた。

第三章「杜牧の詠物詩」は、「晩唐の詠物詩」を受けて書かれたもので、杜牧の詠物詩を詠物詩全体の流れの中に置き、そこからその特徴を探ろうとしたものである。

従来の杜牧の詠物詩に関わる論述は、歴代の詩話等では「早雁」詩に見られるような政治的寓意性を持つことを高く評価するものであり、近年の注釈、研究においては「柳絶句」「帰燕」に詠われるような懐郷の情に着目したものであった。確かに杜牧には杜甫の詠物詩の抒情性を継承する面がある。本章では、一節を割いてこのことを跡づけるとともに、盛唐の詠物詩と晩唐のそれとの差異を知るために、杜牧と杜甫との差異についても論じた。また、「晩唐の詠物詩」で指摘した、晩唐後期において流行した七言律詩による詠物詩に直接連なるような作品が杜牧にあることも併せて論じた。従来の研究は、杜牧個人の人生観を作品中から引き出そうとするあまり、「柳絶句」のような作品から、直接に故郷を思う言葉などを引き出していたのであるが、伝存する彼の作品を見る限り、そうした抒情性豊かな作品はあくまでその一部でしかないことが分かる。実際には、それとはまったく性格の異なる詠物詩が数多く存在しているのであるが、本章第二節はそれらの作品をできるだけ多く取り上げ、その性質を詳しく分析したものである。その特質を一言で言うならば、従來說かれてきた抒情性ではなく、その対極にある機知的、諧謔的な性格があるということである。とりわけ絶句で書かれたものにその傾向が著しく、斬新な発想で詩の享受者を楽しませようとするところに作品の眼目がある。そして、こうした作品の多くは、杜牧自身が編んだ本集(内

集)ではなく、後人の手で補われた外集に収められていることも指摘した。おそらく杜牧はこれらの作品を艶詩などと同様に、自らの文学観にそぐわないものとして、意図的に排除したと考えられる。しかし、本集に採られている作品の理解にもこうした彼の機知性、諧謔性を把握しておく必要があると思われる。第三節はそのことを具体的に作品に即する形で詳しく論じたものである。

第二編は、晩唐の司空図(八三七―九〇八)の文学論を主に扱ったものである。彼は、詩論家としてその名を知られ、文学批評史において重要な位置を占めている。彼の文学論の特徴は、詩の批評において「味わい」を重視したところにあるとされる。第一章「司空図の文学論―味外の旨とは何か―」は、その「味わい」概念がどのような意味を内包するものであるかを彼のテキストに即して分析した。

「味わい」の概念は、彼の「与李生論詩書(李生に与えて詩を論ずる書)」の中で、「味外の旨」という言葉によって提示されている。従来の研究では、この「味外の旨」は文学作品に備わる趣のことと解釈されてきた。しかし、書簡を具に分析してみると、中心的に論じられているのは、「味わい」ではなく、作品とその作者との関係であり、司空図はこれを「格」および「体」という二つの概念を用いて論じていることが分かる。そして、「味外の旨」とは、書簡の文脈に従うならば、「格」すなわち詩のスタイルに表れるところの作者の個性、資質の比喩であると考えられるのである。本章は従来の解釈の問題点を指摘しつつ、司空図のテキストに沿う形で、彼の文学論を滋味論としてではなく、「格」論、「体」論として捉え直すことを意図した。以下、取り扱う内容を節ごとに簡単に述べることにする。

第一節では、「味外の旨」の従来の解釈とその問題点を指摘した。「味外の旨」の解釈には諸説あるが、その基本となるのは、「味外の旨」を詩文そのものの趣として理解する滋味説である。滋味説は陸機「文賦」や『詩品』、『文心雕龍』などの過去の文学理論における「味わい」を手掛かりとし、それを司空図のテキストにそのまま適用しようとするものである。本章では「与李生論詩書」の文脈を詳しく見ることで、「味わい」について述べた冒頭部分は、その後には本論として論じられる「格」の比喩でしかないことを指摘した。

第二節では「与李生論詩書」以外の司空図の文章を参照しながら、彼の述べる「格」および「体」について論じ、これらの概念の性質と司空図文学論におけるその位置づけを考察した。とりわけ、書簡との構成の類似から「題柳柳州集後(柳柳州集の後に題す)」を大きく取り上げている。また、これらの文学論の分析から得た「格」論、「体」論を踏まえて、「与李生論詩書」の後半部分の分析を試みた。

第三節は「与極浦書(極浦に与うる書)」に見える意境説を取り上げた。意境説は同書簡で「象外の象、景外の景」という言葉によって語られるものであるが、これは従来「三外説」として「味外の旨」「韻外の致」と同列に置かれ、司空図文学論の中核をなす思想として認識されてきた。本章では、書簡を読む限り、彼が「象外の象、景外

の景」を絶対視しているわけではないということ、むしろ対象を写實的に描き出す別のスタイルの良さを説いているということを論じた。またこれを踏まえて、従来の「三外説」に基づいた、朦朧とした美を愛する詩論家というイメージとは異なる、新たな司空図像の提示を試みた。

第二章「司空図文学論の歴史的 position づけについて — 「格」論および「体」論を中心として —」は、司空図の文学論をこれまでの滋味説ではなく、「格」論、「体」論として捉えた場合、彼の文学論が文学批評史の上でどこに position づけられるのかを考察したものである。

第一節「受容史的側面から見た司空図文学論」は、司空図の文学論が後世どのように受容されてきたのかを歴史的に辿ったものであり、彼の詩論を「味わい」の論として捉える所謂「滋味説」がいかんにして形成されてきたのかを跡づけたものである。論の中心となるのは、清・王士禛の「神韻説」である。神韻説は、司空図および巖羽の「興趣」の理論を基礎として成ったもので、その後の近代の司空図研究にも多大な影響を及ぼすものであるが、王士禛の司空図理解には、いくつかの重要な点で問題があり、必ずしも司空図文学論の全面的な理解のもとに行われたものであるとは言い難い。その問題点を指摘することで、従来の司空図(味外の旨) — 巖羽(興趣) — 王士禛(神韻)という文学的継承関係には少なからぬ問題のあることを指摘した。

第二節では、清末の許印芳の司空図受容を論じた。許印芳は『詩法萃編』という詩論のアンソロジーを編み、そこで司空図の詩論を論じている。彼の司空図論は王士禛の神韻説に依拠せず、司空図のテキストに基づいた独自の解釈を提示するものである。ここでは、彼の論を主に「直致」や「格」への注目という視点から取り上げ、その独自性と有効性を論じた。許印芳の解釈にももちろん問題がないわけではないが、「滋味説」一辺倒の現在の司空図研究を再検討する上で貴重な視座を提供するものと言えるだろう。

第三節「同時代および過去の文学論との比較」は、「格」論、「体」論として司空図の文学論を捉えた場合、同時代あるいは過去の文学論とそれはどのように関係づけられるのかを考察した。過去の文学論では主に曹丕「典論論文」や鍾嶸『詩品』、劉勰『文心雕龍』を、同時代のものとしては皎然『詩式』、齊己『風騷旨格』等を取り上げた。その結果、司空図の「格」論、「体」論は多くの点で皎然『詩式』をはじめとする所謂「詩格」との繋がりが深いことが確認された。従来、この繋がりは単に「体」論等の表面的な類似の指摘に止まった限定的なものであったが、本章により、その繋がりは「格」や「直致」をも含めた、より広範なものであることが確認できたと考える。

第三章「司空図の詩と詩論 — 「与李生論詩書」の引用句を中心として —」は、司空図の詩作品とその詩論との関わりを考察したものである。司空図は詩論家として知られているが、その詩作品についてはこれまであまり論じられることがなかった。仮に論じられることがあっても、それは彼の詩と詩論の価値を比較したものであり、その

詩論に比べて作品は良くないという評価が下されることが常であった。しかし、こうした評価のために、その作品の研究が軽んじられることは、彼の詩の理解という点ではもとより、その詩論の研究という点においても多くの問題があると言わなければならない。そこで本章では、文学論だけでなく、彼の実作にも着目し、この両者の関係を考察することで、文学論の分析だけでは窺い知ることのできなかつたものを明らかにしようと試みた。

第一節「晩唐の詩的傾向と司空図」は、中晩唐の詩に対して司空図がいかなる態度で臨んでいたかを分析したものである。ここで主に取り上げたのは、「苦吟」と「意境説」である。この分析により彼が詩を論じる時の詩に対する基本的な態度、論理の基礎となるものを確認した。

続く第二節および第三節では、司空図が文学論を述べるに当たって挙げた例詩を手掛かりに、その詩と詩論との関係を考察した。具体的には第二章で「与極浦書」を、第三章で「与李生論詩書」を論じた。「与極浦書」では、「題紀の作」として引用される彼自身の作品はもちろんであるが、書簡後半で取り上げられる王維、杜甫などの詩句についても分析を加え、司空図における、実際の風景、景物と文学作品との関わりを論じ、彼にとっての景物の意味を考察した。

「与李生論詩書」では、書簡に引用される二十四聯の詩句に着目し、それらがどのような性格を持つものであるか、また彼の文学論全体とどのように関わり合うものであるかを論じた。従来これらの詩句は、単に「味わい」の有無によってすなわち評価の対象としてのみ認識されてきた嫌いがある。本章の分析により、これらが彼の文学論全体と論理的に関連づけられるものであることが確認できたと思う。またこれらの作品に見られる諸特徴を具体的に提示することで、今後、彼の詩作品を論じるためのいくつかの手掛かりを提供することができたと考える。

(論文審査の結果の要旨)

唐代の文学を四つの時期に分け、「初唐」「盛唐」「中唐」に続いて、唐王朝最後の七十年間ほどを「晩唐」と称するのは、もともと16世紀に盛行した古文辞派の、「盛唐」を至上とする詩観から始まったものであった。古文辞派が一扫されたのちもこの時期区分は今日に至るまでふつうに用いられ、そのためか、「晩唐」の文学は「盛唐」が早くから注目され、「中唐」が近年見直しが進んでいるのに比べて、研究の手薄な時期である。論者も指摘するように、杜牧・李商隠・温庭筠といった突出した存在にのみ偏り、晩唐文学を総体として捉えた成果は乏しいと言わねばならない。本論はその晩唐の文学を対象として、「詠史詩」「詠物詩」を中心とした詩、司空図を中心とした文学論、その二つに焦点を当てた研究である。それは晩唐のすべてを掌握するには至っていないにしても、取り上げた領域においては少なからぬ新たな知見を提示し、晩唐文学研究に価値ある進展をもたらしたことを高く評価したい。

「詠史詩」は歴史上の人物を題材とする詩であるが、論者はまず晩唐に至るまでの流れをたどる。過去の人物に対する賛美、その人物に対する作者のあこがれ——そのような性格をもっていた詠史詩は、唐代に入ると過去と現在を対比させてそこに生じる感慨を詠う「懷古詩」へと転換する。晩唐にもそれは継承されるが、しかし晩唐の詠史詩を特徴づける最も大きな点は、歴史のなかに「もしも」という仮定をもちこみ、そこに皮肉や逆説をこめるといふ、機知的な態度である。作者自身の感慨をうたうことはなく、感傷的な抒情を離れて、いかに奇抜な発想を盛り込むか、それが詩の要となる。杜牧の詠史詩に仮定が入ることはこれまでも指摘はあったが、本論は小詩人の詠史詩にもそれが認められ、晩唐詠史詩全体の傾向であることを明晰に解き明かす。

「詠物詩」はとくに南朝宮廷で活発なジャンルであったが、杜甫に至って大きな変化が生じる。南朝のその対象物が宮廷のなかの華麗な物に限定されていた題材が大きく広がったこと、そしてまた自己を投影してうたうこと、である。杜甫によって新たな様相を呈した詠物詩が中唐にも引き継がれる。晩唐に至ると、詠物の対象物と自己との関わりがうたわれる点では杜甫を引き継ぎながら、題詠であることにこだわる点では南朝詠物詩に近づく。しかし一方で唐代の詠物詩の流れとは断絶し、自己を投影しないという点で南朝に直接繋がる詠物詩の出現が晩唐後期に出現する。そこには機知・諧謔を伴うという、詠史詩にみられた特徴が見られる。杜牧の詠物詩は、従来政治的寓意なり自身の感慨なりを籠めたものに注目が集まったが、それとは異質の、機知・諧謔とともに物を詠ずる詩こそ彼の特徴であって、それは晩唐後期を開くものであったと説く。

論者が晩唐の詠史詩、詠物詩について如上の点を明らかにしえたのは、個別的な作者を取り上げて考察することから脱して、ジャンルを通時的な流れのなかに位置づけて把握する姿勢、晩唐という時代の文学を総体として捉えようとする態度による。これは研究の方法としても個別に偏向していた弊を破り、今後のありかたを方向付ける

ものである。また詠史詩、詠物詩の時代による変容を明らかにしたのみならず、晚唐文学として一括されていたものが、前期に属する杜牧・李商隠らと後期に属する小詩人群の間で二層を成している様相も新たに浮かび上がってきた。

後半の司空図の文学論については、従来の理解を揺るがす大胆な指摘をさらに数多く提起している。司空図といえば「味外の旨」、詩そのものから感取される「味わい」を重視したことで知られるが、論者はそれを述べた書簡を読み直すことによって、司空図の主旨は「格」と「体」を主張したものであって、「味わい」は「格」の比喩に過ぎないと論じる。「格」とは作者の資質のようなもの、「体」はそれが文体としてあらわれだしたものという論者の説明はいまだ十全なものでないにしても、これまでの解釈に大きな変更を迫ることは確かである。ただ論者は「体」「格」論としての読み直しを論ずるのに急ぐあまり、従来の「味わい」説については冷淡である。のちに蘇軾が「味外の旨」の箇所をことさらに取り上げ、巖羽が「興趣」として展開し、王士禛が「神韻説」として標榜するに至った流れも、たとえ司空図の本意からそれたものであるにしても、テキスト本来の意味が享受者それぞれの理解に引きつけて新たな詩論を生んでいく過程として無視はできないだろう。

もう一つよく知られる司空図の詩論に「象外の象、景外の景」がある。詩は現実を越えた詩的形象を表現するものだというのである。ところがこれも彼の書翰を子細に読めば、それとは対極に位置する、眼前の事物の忠実な写実を主張したものであると論者は言う。そして司空図が実例として示した自作の詩を分析し、詩論家として受け止められたために軽視されてきた司空図の詩人としての面も掘り起こしている。

取り上げた司空図の書翰は詩論としてこれまで熟知されていたものばかりだが、先入観に縛られずに読み直すことによって新たな面が立ち現れてくることを、本論はみごとに示している。そして司空図自身の詩観について、本論の提起した解釈は今後広く受け入れられることだろう。

本論前半の「詩」と後半の「詩論」との間に連関が認められないのが惜しまれるが、晚唐文学の二つの点を取り上げたと考えれば、その二点について説得力に富む論を提示したことは確かである。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の論文として価値あるものと認められる。なお2011年2月8日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。